
敵のいない世界に正義の味方がいました

うるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敵のいない世界に正義の味方がいました

【Nコード】

N1749W

【作者名】

うるる

【あらすじ】

お題から物語を想像して書く小説。

今回のお題は【敵のいない世界に正義の味方がいました】。
敵のいない世界に紛れ込んだ一人の少年の物語。

「さあ、この世界に蔓延る悪を倒しに行こうじゃないか！」

「いませんよ。この世界に敵なんて。」

それが、敵のいない世界に正義の味方が紛れ込んだ瞬間であった。

【敵のいない世界に正義の味方がいました】

僕はどこにでもいそうな、ごく普通の少年だった。そんな少年の前に現れた、不思議な猫の使者に

「君は、正義の味方になりたいかい？」

と言われたのだ。僕は迷わず、

「はい」

と答えた。すると猫はすぐに時空間を作り、僕を剣と魔法の世界へと連れていってくれたのだ。

正義の味方になって、剣と魔法で敵を倒していくなんて、ただの夢物語だと思っていた。だから僕は高鳴る期待を胸に、猫の連れていった世界へと飛び立ったのだ。

—だから敵のいない世界なんて、信じられなかった。いや、そもそも“敵のいない世界”というのがよく分からなかった。

最初は街の人に訊いても、みんなにこやかな顔をして

「敵？ そんなのいませんよ。」

と口を揃えて豪語するから、僕は騙されているのではないかと思うぐらいであった。しかし、実際にどの人もそう答えるし、その言葉に悪意の一つも感じられないのが不思議なぐらいなのだ。

更に訊いてみると、この世界は一つ巨大な独立国家になっていて、政治・経済・文化・宗教：色んなものが認め合わされた世界となっ

ているようだ。誰も反発する者は現れないし、誰かを憎み、誰かを殺すことなんて有り得ないという。

そもそも「悪」や「敵」「殺す」などの言葉もこの世界では忘れられた言葉、つまり“死語”になっているというから驚く。

そう、本当にこの世界に正義の味方なんて不要なのだ。必要性の欠片もないのだ。

「どうということなんだ…？」

そう先に言ったのは、僕ではなく、僕の近くにいたあの喋る猫だった。

一日色んな人に聞き込みをしたが、結果は同じだった。夜になり、僕と猫は宿を取り、部屋でこの世界について話を整理することにした。しかし、猫が先にそんなことを言うものであるから、私も溜め息を吐き、言い返した。

「いや、僕がそれを訊きたいところなんだけど。」

「それもそうだったね。いや、本当に申し訳ない。」

怒りのやり場を猫にぶつけてもよかったのだが、肝心の連れてきてくれた猫も心底この状況を把握していない状況だったので、ぶつけても仕方なさそうな気がした。

「君に正直なことを話すと、実は時空間の移動時に“空間のズレ”が生じたみたいなんだ。だから本当はちゃんと敵のいる世界に連れていく予定だったし、私もこの世界に来て、正義の味方がいないという、その“仕組み”が分からないんだ。」

そうだったのか…猫の言葉に僕もすっかり黙り込んでしまった。

「…結局どういう事なんだろう？」

ようやく口を開いて出てきた言葉はそんなものだった。しかし、猫は意味深に答える。

「君の勇者的本質が問われるってことだろうね。」

「勇者的本質…」

そもそも“正義の味方”とは何か。何が正義で、何が悪なのか。そ

の本質が問われるというのか。

「とにかく。」

「？」

「じつとしても仕方ないし、この世界にどうして“悪”や“敵”が存在しないのかを調べなくちゃいけないさそうだね。」

そうしないと、この世界は平和のままで、自分はこの世界にいる意味がなくなる。せめて、猫の言う通り、この世界の“仕組み”を僕は知る必要がある。知らなくちゃいけない。

そこで、猫が不意に喋る。

「ねえ。私、一つ思ったことがあるんだけど。」

「ん？なんだ？」

その猫の一言が、この世界に來たばかりの僕たちを、一気にこの世界の真理に近づくことが出来たのなんて、想像しなかった。でも、確かに考えてみると、この“勇者的本質”というのは実は単純明解なものであったのかもしれない。

そこから僕と猫は次の日から協力して、一つの目的地に向かうことにした。それは、猫が言ったことが正しければ、それはきつとそこにしかこの世界の答えがないだろうと思ったからである。

敵のいない国なので、どの場所に行くにも、市民の抵抗もなく、楽に行くことが出来た。そして辿り着いたのはこの世界を統制している国家の城内。そうだ、この世界の王との対面に辿り着いたのだ。

「よくぞ來たな、旅の者よ。大いに歓迎するぞ。」

そう、この世界の王も笑顔で対応してくれる。特に我々に対する警戒など一切ない。

「突然ですが、王様。ここに“悲しみ”と“憎しみ”を取り除いた研究をしている方はいらっしゃいますでしょうか？」

そう、そしてこれが僕たちの一つの結論だ。この世界には喜びばかりが溢れていて、悲しみや憎しみが一切ないのだ。よく、正義の味方も

『この世にはびこる悲しみや憎しみがある限り、私は戦い続ける！』
なんて言っている。悲しみがあるから憎しみが生まれ、そこから敵意や悪意が発生しているハズだ。猫が気付いて言ってくれたように、この世界にはまるでそれがないのだ。となると考えられるのは人間から悲しみや憎しみを何かしらの方法で取り除いたとしか考えられない。

しかし、そんな核心部に触れるようなことを王様が許してくれるだろうか。

「おお、いるぞ。おい、連れてこい。」

いや、何ともあっさりである。僕と猫はお互いに顔を合わせて、アイコンタクトを取った。

「王様、申し訳ないのですが直接研究室に行ってもよろしいでしょうか？」

こうして僕らは衛兵として働くことのない衛兵の案内で国家機密に相当するような研究室へと易々と案内されたのだ。

研究室と呼ばれる地下の奥深く。まるでそこだけ何かに守られているかの如く、何重にも扉があった。しかし、その扉には頑丈な造りになっているだけで、誰でも通れるような、セキュリティの欠片もない扉だった。

一体いくつの扉を開けたのだろうか。ようやく研究室らしきところに到着した。

「ここに客人とは：君たちはこの世界の人間ではないな。」

研究室に一つの椅子と机があり、そこに座っていた一人の男がそう言った。椅子と机は向こうを向いていたので、男の顔は見えなかった。机の上にはパソコンが一台。周辺には見知らぬ器具が沢山散らばっていた。そして、何とも生温く、生臭い空間である。

「はい。僕は別の世界から“正義の味方”としてやってきました。しかし、ここには敵が存在しない。そしてこの世界には“悲しみ”や“憎しみ”が存在しないことが分かりました。」

流石にこの世界でも猫は喋らないので、代わりに僕が全てを話すことにした。

「そうだ。私が生み出したのだよ。悲しみも憎しみも持たない人間たちをね。」

やっぱりそうか。

「しかし、一体どうやって？」

すると男はパソコンのキーボードを手際よく打ち、僕らの目の前に立体映像を映し出した。そこに映し出されたのは人間のDNAであった。

「私は人間のDNAを解析して、悲しみや憎しみの成分を発見したのだ。そして、その成分を消す作用を作ったのだ。つまり、その人が悲しみや憎しみを生む直前に、その部分を削除させて、何もなかったようにさせるのだ。」

映像にはそのDNAの悲しみや憎しみの成分に拡大され、それが活動的に動き始めると、別のDNAの成分がそれを止めるのだ。

未だに男はこちらを向かない。

「このような人間だけを増やしていけば、誰も誰かを悲しんだり憎んだりしない。こうしてみんな笑顔でいられる素晴らしい世界が出来たのだ！」

そこで猫が僕の肩に乗り、男には聞こえない声で僕に囁いた。僕はそのまま猫の言葉を男に話した。

「じゃあ、悲しみや憎しみを持った人間はどうしたんですか？」

「勿論一人残らず、殺したに決まっているだろう。」

「！！」

この展開は想像出来たが、流石に抑揚の無い話し方で、そう言われるのが衝撃的だった。

「世界の新設には犠牲が必要なんだよ。悲しみや憎しみを持った人間なんて、ただの敵。この世界に必要ないのだよ。」

ようやくこの世界の真理が見えてきた。敵のいないこの世界の真理が。僕は初めてこの世界に対して怒りを覚えた。手を握り締め、身

体を震わせた。

「おやおや、そう言う君は私が敵だと思うかい？それは大きな間違いだ。私のお陰でこの世界に正義の味方が必要なくなり、悪もなくなり、殺し合いも支配もなくなったのだよ。正義の味方はそんな世界を望んでいたのではないのかい？」

そうかもしれない。そうかもしれないんだ。でも、それは違う。

悲しみが無い世界ではない。悲しみを生まない世界にしたかったんだ。

憎しみが無い世界ではない。憎しみを生まない世界にしたかったんだ。

「違うよ。」

それを先に言ったのは僕ではなく、肩に乗っている猫だった。男がこつちを向かないと判断して話し始めたのだろう。私は急に横で話し始めた猫に驚いたが、男は別の声に対して特に反応を示さなかった。

「確かにこの世界は平和だ。けれども、ここはまるで人間の世界というよりもロボットの世界だね。正の感情エネルギーしか出てこない。そんなのは人間に喜んで服従しているロボットみたいだよ。人間はロボットにない負の感情エネルギーも持っている。この世界になくなった悲しみや憎しみといったものだね。大切な人が亡くなつて、悲しんだり、自分の持っているプライドを傷付けられ相手を憎む。確かになくしてしまえばいいエネルギーのように見えるがそうではない。」

ここで男の肩が少しだけ動いたような気がした。猫は別段気にすることなく話し続ける。

「人間は負の感情エネルギーを持った後、正の感情エネルギーを増幅させる効果があるんだ。悲しみを乗り越えて、頑張ろうとする人。怒りや憎しみを堪える事で、新たな一步を踏み出す人。人間の世界というのは実は上手に正負の感情エネルギーが成り立った世界なん

だ。勿論負の感情エネルギーが大きくなると、悪が生まれてしまう。それでも、正の感情エネルギーを持つ、所謂“正義の味方”が悪を退治するんだから、やはり人間の世界というのは面白い具合に成り立っているんだよ。」

猫はここでふう、と小さく息を吐くと肩の上で器用に毛づくろいをし始めた。後は任せたよ、とでも僕に言ったかのように。

「確かに犠牲を伴わない世界なんてないなんて思ったりはしない。僕の考え方は甘いと思う。でもあなたみたいな科学者なら、もっと人間らしい世界を作れたのではないでしょうか。やっぱり人間である限り、悪がいて、正義がいるんです。争うんです。勝者がいて、敗者がいて。それが人間なんです。」

僕はそこまで言って、自分の本当に言いたい事を少し考えて、そしてそれを最後に口にした。

「あなたは、本当にこの世界を望んでいたのですか？」

そこまで言い切って、僕は言葉を失った。問いである以上、彼にどう声を掛ければいいのか分からなかった。それでもこの男がこの世界を望むのであれば、きっとこれ以上僕らが何を言っても無駄であろう。しかし、彼に何かが伝われば……と願い、僕は言った。

すると男は先程少しだけ動いた肩を再び震わせ始めた。それに合わせるかのように、目の前に揺らいでいたDNAの立体映像も揺らぎ、そして消えた。そして遂に男は椅子をこちらに向けた。その姿に僕は勿論、猫も僕の肩から落ちそうになったぐらい驚いた。

男は人間の形状はあっても、自身の姿がほとんどロボットのようない機械塗れの姿になっていたのだ。

「そうか……そういうことか。変だと思ったよ。これだけの人間がいて、あなたが何故生きているのか。生み出した人間であれば、もう生み出してから数千年は経っているはずなのだから人間であれば、もうとっくの昔に死んでいたはずだ。」

と肩で猫がそう呟く。最早男の正体が分かった以上、自分が喋っても問題ないと判断したのだろう。

機械の男は構わず、尚もギシギシと自分の身体を震わせている。

「私の作った世界は間違いだと何度も考えた。神が作り出した人間に対する冒涇だと思った。何度も私はこの世界で生きる喜びを失いかけた。この世界は、人間という名前の生物が住んでいるだけの、ただのニセモノの世界だったのか……」

「人間なんて悲しみも憎しみも取り払えばいい！誰かが誰かを恨み、殺してしまう世界なんて、消えてしまえばいいのだ！！」

「私はこの世界を作ってしまったことに大いに後悔している。私は悲しい。どうして私はこの世界を作ってしまったのだろうかと。」

「この世界に大いに満足だ。みんなが笑顔で暮らし、みんなが楽しく平和に過ごせる世界。これが人間が望んだ世界なんだろう！」

その後は分からなかった。機械の擦り切れるような高速で何かが動いている音や、どんどん高くなっていく男の声、そして最早日本語とは聞き取れない途切れ途切れの音声。それでもこの会話で彼は2人の自分と戦っているのは分かったし、どちらの思いも持っていた。そして彼がこの世界で最後の悲しみと憎しみを持つ人間だったということが分かった。そして男は葛藤の末、静かに事切れたのだった。

「結局、何だったんだろうね。」

城をこっそりと出た僕らは一つ、溜め息をゆっくりと吐く。青空が綺麗だ。

「だから言ったじゃない。勇者的本質が問われるんだって。猫は相変わらず毛づくろいをしながら答えた。」

「だからさっき私が言っていたように、人間の世界である以上、敵がいて、味方がいるの。敵も味方もいない世界なんて有り得ないのよ。」

「でも確かに単純に考えると悲しみや憎しみはない方が、人間の世

界にとっては幸せなのかもしれないね。」

「価値観なんて人それぞれよ。でもあなたは这个世界が好き？」

確かにみんな笑顔だ。幸せの絶えない世界だ。誰もが仲良く暮らす、理想的な世界だ。でも…

「何か違うよね。」

それは分らない。口で言えば一番なのだが、そんな抽象的なことを口で言う事が出来なかった。きっとあの時に猫の言ったことが大半なのだろうけど、きっとそれだけではないような気がする。

「その思いを大切にしたらいいんじゃないかな。」

「そうかな？」

「そのことを分かっているのならきっと、君はいい正義の味方になれるわよ。」

そう猫は言うのだが、僕自身にはそんな実感が一切なかった。また正義の味方になって、敵と戦ったわけではないのに。ただの正義の味方になるような“準備”をしただけなのに。

「何事も、準備と心構えて大切よ。」

そうだ。きっとこの世界に辿り着かなければ僕はただの“正義の味方”であっただろう。でも今は少しだけ違う。敵のいない世界で正義の味方になったから僕は――

「うん。行こうか。本当に正義の味方が必要な世界へ。」

「了解。今度は“空間のズレ”が起こらないといいね。」

「そう願うよ。」

そうして猫と正義の味方は、敵のいない世界から去っていったのだった。

(後書き)

案外平和な感じの物語なのかなと思いきや、そもそも「敵のいない世界」って何だ？という問いに入り、考えた結果、正義の味方や勇者のいる意味を問い始めるのかなと思いつきました。

途中まで悲しみや憎しみのない世界を作り上げるのは楽だったので、如何にしてその世界を否定するのかというので悩みました。単純に考えれば確かに正義の味方たちは悲しみや憎しみを無くそうとはしているからね。結論は猫の言葉に込めたのですが、この作品の中でも取り上げた「勇者的本質」って実は物凄く難しいんじゃないかね？とか思ってしまった(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1749w/>

敵のいない世界に正義の味方がいました

2011年10月9日14時56分発行